

京都・保津川河畔の久邇宮邦彦王「保寿泉」碑について

——邦彦王の「保寿泉」命名と平尾竹霞の石碑建立に関する考察——

内 田 誠 一

一、序

筆者はここ数年、久邇宮とその書について研究し、既に本紀要に二篇の論文を発表している。^(注1)二〇一二年の春に、保津川河畔に久邇宮邦彦王(図1)の「保寿泉」碑が残っていることを知り、調査に赴こうと考えた。調べてみると、保津川河畔には土方久元の詩碑も残っていることがわかり、筆者の興味は増幅された。



図1 久邇宮邦彦王肖像(『邦彦王行実』より)

保津川は、大堰川の中

流部の亀岡盆地と京都盆地の嵐山までの約十六キロを指す。「保津峡」とも云う。なお、嵐山の渡月橋から下流は桂川となる。ところで、保津川下りは、文字通り舟で保津川を下るのであって、こ

の二基の石碑を見ようとしても、下っていく舟の上から見ることしかできない。上陸して調査するには、舟一隻またはゴムボートを借り切るしかないことを、特定非営利活動法人・プロジェクト保津川の副代表理事で大阪商業大学准教授の原田禎夫氏より教えられた。

また、同氏および保津川遊船代表理事の工藤正氏の考えでは、舟を利用した場合、増水時には接岸して上陸することが困難なため、ラフティングの方が好ましいとのことであった。ラフティングとは、楕円形のゴムボートを用い、パドルを使って川下りするウォータースポーツである。

二〇一二年九月十日、筆者はラフティングで保津川を下り、「女淵」を過ぎて「寄り方」と呼ばれる場所に立つ土方久元の詩碑、および廻り淵の岸上に立つ久邇宮邦彦王の「保寿泉」碑を、それぞれ上陸して調査することができた。本稿では、邦彦王による「保寿泉」の命名と、南画家・平尾竹霞による「保寿泉」建立の経緯に関して、実地調査を踏まえ、文献資料に検討を加えながら考察していきたい。土方久元の詩碑、およびその詩に対する当時の漢詩人たちの次韻に關しては、別稿で論ずる予定である。

なお敬称・敬語については、史家の仕法に倣い最小限度にとどめた。また、本稿で写真版に用いた肉筆資料のうち、所蔵者名の記していないものは、全て筆者所蔵のものである。

二、「保寿泉」命名と「保寿泉」碑建立の経緯について

(1) 「廻り淵」と「保寿泉」碑について

「保寿泉」碑の書丹者は久邇宮邦彦王（一八七三～一九二九）である。王は、久邇宮朝彦親王の第三王子で、久邇宮第二世。香淳皇后（昭和天皇皇后）の父宮に当たられる。邦彦王の経歴については、注（1）に示した拙稿「久邇宮三代の書について」をご参照いただきたい。この「保寿泉」碑は、保津川の「廻り淵」の岸上に建てられている。廻り淵は、廻りが淵、あるいは曲り淵とも云う。廻り淵について、長岡参寥『四季の保津川 嵐峡風雅集』（拈華社、一九四一年）では、

「水流の甚だ緩にして、深淵と為る処、廻り淵の名あり、直兄の歌にいはいはく、龍かみや蟠りぬるまかりふち うつまくみればそこつ寒けし」と。水色蒼々として、深さ幾丈なるをしらず、峡中第一の深潭と為す」

とある。「直兄」とは加茂季鷹門下の京都の歌人・松田直兄（一七八三～一八五四）のことであろう。和歌の大意は「龍神がとぐろを巻いている曲り淵、その水が渦巻いているのを見ると水底が寒々としているようだ」。「峡中第一の深潭」とあるが、『保津川文化 1号』（保津川文化史研究グループ、一九七一年）所収の「保津川下り古老

聞書き」（伊豆田文平翁談 明治37年生 沢村秀夫記）を見ると、伊豆田翁が「〴〵曲り淵」は水深十五米、保津峡で一番深いところですよ。このあたりが保津川下り十六キロの半分のところですよ」と説明している。水深十五メートルとは驚きである。

廻り淵は、保津川を下って「小鮎の滝」や「女淵」を通過し、「長瀬（二股の瀬）」を過ぎると、右に曲がる場所にある。曲がると言っても、単純に「L」字型に曲がるのではない。ギリシア文字の「Ω（オーメガ）」の両端を、少し左右に引き伸ばしたような形である、とても言えばよいだろうか。この曲り角の淵で水の流れが緩慢となり、「Ω」字の円形部分で水が渦を巻いている。よって「廻り淵」「曲り淵」と呼ばれている。松田直

図2 「保寿泉」碑



兄が「龍神がとぐろを巻いている」と歌ったのも、さもありなんでしょう。この淵は特に深いことから、現在は、ラフティングの若者にとっての、恰好の飛び込みスポットとなっている。この廻り淵の岸上に立碑されているのが「保寿泉」碑（図2）である。三角形の自然石で、高さ百七十三糎、底辺は二百六十四糎。中央に行書で「保寿泉」とあり、改行して「兼堂」と署してある。「兼堂」は邦彦王の雅

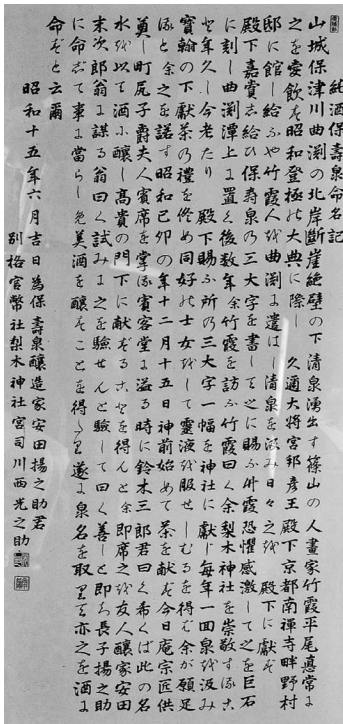
号。署名の直下に「邦彦王章」（白文方印）「兼堂」（朱文方印）の二印がある。なお、「保寿泉」の「保」の字の右肩には「憲章文武」（白文長方印）の関防印がある。筆者が調査した時には、碑面のほぼ半分が苔むしていた。

なぜ、ここに「保寿泉」碑が立碑されているかと言えは、そこに泉が湧出しているからである。保津川を下る船頭が、昔からこの泉水で喉を潤したと言われている。この泉に「保寿泉」と命名されたのが、邦彦王である。

（2）川西光之助筆「純酒保寿泉命名記」に見る命名と石碑建立の経緯

命名の経緯については、京都の梨木神社の宮司であった川西光之助翁の「純酒保寿泉命名記」（以下、「命名記」（図3）に詳しい。これは昭和十五（一九四〇）年に、川西光之助翁が聯落の画仙紙に墨筆を揮い、安田酒造の安田揚之助氏に贈ったもので、現在は額装

図3 「純酒保寿泉命名記」



されて、光之助翁の令孫の川西光敬氏の所蔵となっている。なお、梨木神社にも川西翁の「命名記」が伝わっているという。

この「命名記」の文章を仮に三段に分割し、その第一段を次に引用する。原本には句読点が付けられていないが、便宜的に内田が句読点を付した。また読みやすさを考慮して、原本にはない記号や空格を加えた部分がある（以下同様）。

「山城保津川・曲渕の北岸、断崖絶壁の下、清泉湧出す。篠山の人・画家竹霞平尾恵 常に之を愛飲す。昭和登極の大典に際し、久邇大將宮邦彦王殿下、京都南禅寺畔 野村邸に館し給ふや、竹霞 人を曲渕に遣はし、清泉を汲み、日々 之を殿下に献ず。殿下 嘉賞し給ひ、保寿泉の三大字を書して、之に賜ふ。

竹霞 恐懼感激して、之を巨石に刻し、曲渕潭上に置く」

「画家竹霞平尾恵」とは、田能村直入門下の南画家・平尾竹霞（一八五六―一九三九）。竹霞は丹波篠山の人で、王地山焼の陶画工であった平尾竹郭の長男。名は経恵、字は明卿。別号に妙々居士・半雲子などがある。学を、旧・篠山藩士で漢学者の渡辺弗措に学び、画は田能村直入の門下として南画を極めた。

「京都南禅寺畔 野村邸」とは、野村財閥を築いた二代・野村徳七（一八七八―一九四五・号は得庵）の別邸「碧雲荘」。昭和天皇即位の大典の際には、この七千坪に及ぶ広大な別邸が、久邇宮家の宿泊場所として指定された。光榮に思った野村は、大玄関・大書院・能舞台を新築して久邇宮四殿下の御来臨に備えたという。現在、大書院の長押には、邦彦王の熱海での絶筆となった「碧雲荘」の扁額が掛けられているという。邦彦王と倪子妃、そして第一王子・朝融王

図4 久邇宮三殿下



の、大典の折の一齣が写真に残されている(図4)。

さて、右に引用した「命名記」の内容を現代語にすると次のようになる。「山城の国保津川の曲淵の北岸にある断崖絶壁の下に清らかな泉が湧きだしている。丹波篠山の人である平尾竹霞は、いつもこの泉水を愛飲していた。昭和天皇の即位の大典の折に、久邇宮邦彦王殿下は京都南禅寺近くの野村得庵の碧雲荘に滞在されたが、竹霞は曲淵

に人を遣わして清泉を汲ませ、日々その水を殿下に献上した。殿下は褒め称えられ、「保寿泉」の三大字を書かれて竹霞に下賜なされた。竹霞はかしこまって感激して、その文字を大きな石に刻み、曲淵のほとりに据えた。つまり、竹霞が献上した廻り淵の清泉の泉を邦彦王が喜ばれて、「保寿泉」と命名され、さらに玉筆を揮われたことになる。

(3) 平尾竹霞筆「保寿泉水献上図」と、竹霞が角田敬

三郎に宛てた書簡

ところで、竹霞自身が彩管を揮って、廻り淵の清泉の水を汲んで

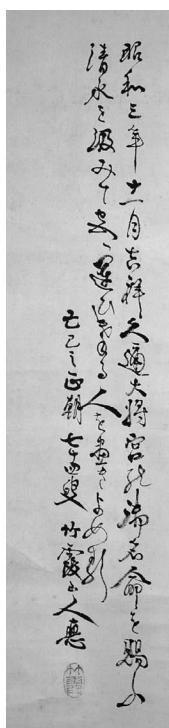
図5 「保寿泉水献上図」(部分)



邦彦王の所へ運んでい
る人を描いた「保寿泉
水献上図」がある。立
烏帽子に浄衣姿で荷
桶二つを天秤棒で担
いで運ぶ人の図(図5)
が下方に描かれてい
る。図の右上には、
「昭和三年十一月吉祥
久邇大將宮の御命名

を賜ふ／清水を汲みて宮へ運びける人を書きよめる／己巳正朝七十四叟竹霞山人恵」とあり、「竹霞」という朱文楮円印が捺されている(図6)。また、本紙左下に捺された遊印には「保寿仙史」とある。これは「保寿泉」に因んだ竹霞の別号である。なお、「保寿仙史」(僊)は「仙」と同義)と刻した別の印を用いた例がある。本紙左上には、「湧出る保寿のいつみきよければくみて捧げん雲のうへまで」という竹霞自詠の和歌が認められている。竹霞の識語では、邦彦王の「保寿泉」命名は昭和三年十一月のこととしている。

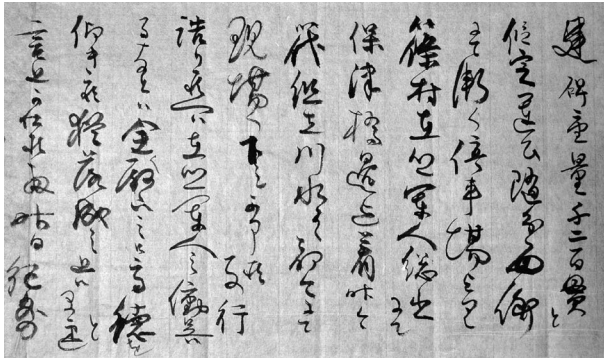
図6 竹霞の識語と落款部分



前引の「命名記」には具体的な月が記されていないが、文章の後関係から判断して、竹霞の言う「昭和三年十一月」という年月と矛盾しない。

次に「保寿泉」の石碑を運ぶ内容を竹霞が書いて、久邇宮家令の角田敬三郎に宛てた書簡(図7)の内容を検討したい。画家の書簡らしく、巻紙の中には仏手柑の画が添えられている。

図7 竹霞自筆書簡(「建碑重量」から「昨日紀州」までの部分)



候末タ二三有之献／上致候てハ如何と存候御差／図被成下度先者又々乱筆／を以て御伺旁如此二御座候／敬具／十一月一日／

「拝啓 過日も推参仕候／節御話申上候保津／建碑重量

千二百貫と／仮定運び随分面倒／にて漸く停車場より／篠村在郷軍人総出にて／保津橋迄迄着昨今／筏組立川水よく都合にて／現場へ下シ可申候事行／詰り候へハ在郷軍人之勳呉／るなどハ全く殿下之御高德をと／仰き候猶落成之上ハ早速／言上可仕候扱昨日紀州／より客来有之携帶之／(仏手柑の画) 甚不出来に候へ共／香棣の／香ひ高く／候へハ為持／分配致候／大殿下ハ御滞京ニ御座候哉／承り度

竹霞山人拝／角田老閣下」(以下、この書簡文を部分的に引用する場合は、読みやすさを考慮して表記を改める場合がある)

書簡には「十一月一日」の日付が記されている。邦彦王は昭和四(一九二九)年一月二十七日に薨去されている。文中に和歌山の仏手柑^{注4}を献上しようとして、「大殿下は御滞京に御座候や」と王の入洛を問う一節がある。「大殿下」は邦彦王のこと。久邇若宮の朝融王と区別するために敢えて「大」の字を冠したものと思われる。となると、この書簡は前年の昭和三年十一月のものと思われる。

しかし、ここで不思議なのは、「運び随分面倒にて、漸く停車場より篠村(内田注：当時の桑田郡篠村を指す。篠村は一九五九年九月に亀岡市に編入)在郷軍人総出にて、保津橋迄迄着。昨今、筏組立、川水よく都合にて現場へ下し申すべく候」とあること。おそらくは十月下旬から末頃までの時点で、千二百貫(四・五屯)もの巨石を亀岡の駅から保津橋付近まで運び、書簡が書かれた十一月一日の段階で、筏を組み立てて、それに乗せて現場へ運ぶ準備が殆ど整ったことがわかる。続いて、「行詰り候へば、在郷軍人の働きくれるなどは、全く殿下の御高德をと仰き候。猶、落成の上は、早速言上仕るべく候」と竹霞は記す。困難を極めた運搬に在郷軍人が力を貸してくれたのは、ひとえに久邇大將宮の御高德のお蔭であると感謝した上で、石碑が落成したら、すぐにもその旨お伝え申し上げる、と伝えているわけである。近いうちに立碑できる状況にあることが、ここから読み取れる。

となると、この段階で石碑には、既に「保寿泉」の三大字が刻されていた、と考えるのが自然であろう。足場の悪い廻り淵の岸辺で

石工が刻字することなど考えられない。よって、邦彦王による命名は、当然昭和三年十月下旬よりも以前のこととしなければ、辻褄が合わない。

(4) 邦彦王の舟に乗った船頭の回想の分析

命名の時期および立碑の時期を考察する前に、この石碑を廻り淵に運んだ情況について詳しく述べている、当時の船頭・村田太一翁（明治四十二年・一九〇九年生まれ）の回想を次に引用したい。聞書きであるから、当地の俚言のまま収録されている。

「その碑を建てるときにね、わしらが殿下（内田注：邦彦王）を舟に乗せていきましたんやわ。ちょうどわしが徴兵検査のじぶんでしたわ。碑の岩は鞍馬から運んで来た大きな石でね、鉄道の貨車に乗ってきたのを亀岡駅から木馬（内田注：木材の搬出などに使うそりの一種。「きんま」とも読む）に乗せてね、ほんで道に竹を敷いて、保津の浜まで運びましてね。ほして筏に乗せて「回りヶ淵」まで持つて行つて建てたんです。」（小谷正治『保津川下り船頭夜話』、文理閣、一九八三年。以下、村田翁の回想はこの書籍よりの引用である）

この村田翁は立碑の際に同行したようで、「わしらが殿下を舟に乗せていきました」とあることから、立碑には邦彦王も立ち会われたことがわかる。石碑の材質については、「碑の岩は鞍馬から運んで来た」とあるので、自然石のまま庭石などに使われる、閃緑岩の「鞍馬石」が用いられたのであろう。「鉄道の貨車に乗」てきた石碑を、「亀岡駅から木馬に乗せ」て「保津の浜まで運び」、さらに「筏に乗

せて」廻り淵まで運んだという村田翁の回想は、前に引用した平尾竹霞書簡の「漸く停車場より篠村在郷軍人総出にて、保津橋辺迄着昨今、筏組立、川水よく都合にて現場へ下し申すべく候」という記述とびたり一致する。

「殿下はその頃、京都師団（聞き手の小谷氏注：旧陸軍）の師団長しとられたんですわ。ほんで毎年そうして川下りに来たはりましてね。わしね、三年ほど続けて殿下の船に乗りましたわ」とあることから、邦彦王は少なくとも三回は保津川下りに来られたことがわかる。松井拳堂『丹波人物志』（同刊行会、一九六〇年）の「平尾竹霞」の項には、竹霞が「網代の清水」（後の保寿泉）のことを「親友本郷大将に語」ったので、「邦彦王の耳に入」ったとある。恐らくは、久邇宮宮務監督の本郷房太郎（一八六〇―一九三一）や平尾竹霞が保津川の景観の妙や廻り淵の泉水の美味を王に紹介したからこそ、王は保津川に足を運ばれたのではないか。ただ、村田翁の「殿下はその頃、京都師団の師団長しとられたんですわ」は記憶違いであろう。王は第十五師団（豊橋）の師団長と近衛師団長を歴任されているが、京都師団（第十六師団）の師団長の経歴はない。王の当時の役職は軍事参議官。「軍事参議官」という役職は一般人には馴染みが薄い。そのため、恐らくは、当時の村田青年の周囲の人が「殿下は師団長してはった方やで」と説明したのではないか。そのため、京都師団長だと錯覚した可能性が高いと考えられる。

『邦彦王行実』（久邇宮蔵版、一九四一年。以下『行実』）には、王の保津川下りが一回のみ記録されている。それは大正十五（一九二六）年の七月二八日のことである。村田翁が「わしね、三年ほど続

けて殿下の船に乗りましたわ」と回想しているので、大正十五年前後にも保津川を下られたと推定される。『行実』では、大正十三年五月、大正十四年五月にも京都に滞在されていることが見える。大正十五年以後は昭和三年まで京都滞在の記録は見えない。となると、村田翁の「三年ほど続けて」というのは、大正十三年から十五年のことと考えるのが穏当であろう。王の舟を漕いだ回想では

「わしが後ろで舵とつとるとね、すぐ横やらに警固の巡査が乗つとりましてね、ほんでわしがね、殿下に気楽にモノ言うさけえね、にらみつけまんにゃわ」

とある。当時の舟は船頭が四人乗っており、船頭の技術レベルによって持ち場が異なっていた。

「一番最初にさせてもらうのんは二番目（小谷注：後）の權で、その次に一番目（小谷注：前）の權やって、それから一番前に乗る棹さしで、それからやね、こいつ一人前やなと見たら後ろの舵とりさせまんにゃ。舵とりは、今やったら二年もしたらさせますけど、昔はそんななさへんのどす。：（中略）：わしの師匠は、五年目にやつと舵持たせてくれたんですわ」

明治四十二（一九〇九）年生まれの村田翁が、船頭修業に出た時のことを、「小学校を六年生で卒業した翌くる年でつさかい、十三歳（内田注：村田翁が自身の年齢を言う場合、必ず数え年）ですな」と言っている。数えの十三歳は大正十（一九二一）年^{注5}。五年目で後ろの舵とりをさせてもらうようになったということから、村田翁が王の舟に乗って後ろで舵をとり、警固の巡査に睨まれたのは、大正十四（一九二五）年以降のこととなろう。村田翁が「三年ほど続けて

殿下の船に乗」つたと回想したのは、前述の大正十三年から十五年と考えてまず間違いない。大正十三年五月には、「一番前に乗る棹さし」として舟に乗り、十四年以降は後ろの舵取りをしたのだらう。

三、「保寿泉」命名と「保寿泉」建立の時期について

（一） 具体的時期の検討

では邦彦王による「保寿泉」命名の時期および「保寿泉」碑建立の時期はいつなのであろうか。

まず命名の時期であるが、前述したように、昭和三年十一月一日の竹霞の書簡の内容から判断して、王による「保寿泉」命名は、昭和三年十月下旬よりも以前のこととなろう。ところで、命名から石碑運搬までには、邦彦王による「保寿泉」三大字の揮毫、染筆の下賜、鞍馬石の選定、双鉤（籠字）の作業、鞍馬石の研磨と刻字という過程を経なければならぬ。一部の作業は同時進行で行われたと考えても、一、二か月の短時日ではまず不可能なのではないか。川西翁の「命名記」では、昭和天皇即位の大典の折に竹霞が泉水を毎日献じたので、邦彦王が命名したことになっているが、それ以前に、王は泉水を賞翫して命名されておられたのではないか。村田翁が次のように回想している。

「うまい水でんにゃ。ほんで毎年川下りされる久邇宮殿下が、その水を汲んでお持ち帰りなつてね、ほんでお茶の会しやはんのどすわ」

この回想から、少なくとも大正十三年から十五年にかけて川下りさ

れた王が、泉水を茶会に使われたと考えられる。よって命名の時期は、大正の末から昭和三年の十月までに絞ることができよう。

次に、「保寿泉」碑建立の時期を検討したい。さきに引用した村田翁の回想の中に、石碑建立の時期について、次のようにあった。

「その碑を建てはるときにね、わしらが殿下を舟に乗せていきましてんやわ。ちようどわしが徴兵検査のじぶんでしたわ」

当時、徴兵検査は満二十歳に達した男子に義務付けられていた。翁の生年月日は明治四十二年八月十一日。翁が検査を受けた年は昭和四（一九二九）年となる。その一方で翁は、「建てはったのは昭和五年（小谷氏注：一九三〇）頃や、たと思ひますな（傍点内田）」とも回想している。時期に関して、翁の記憶は定かではない。小谷氏が聞き取りを行なったのは、翁が七十を越えてからであり、五十年前のことを回想しているわけであるから、年月が臆げであるのも当然であろう。

さて、翁の記憶する時期によれば、石碑建立は昭和四年か昭和五年のこととなるわけである。^(注6)が、しかし、邦彦王は昭和四年一月二十七日に結腸S字状部潰瘍腹膜炎にて薨去されているのである。前年の昭和三年十二月三十日に帰京され、正月は東京、一月六日より熱海に転地、十二日は小田原の益田男爵別荘へ、十六日は陸軍大臣邸での会議、二十一日は宮中の軍事参議官会議、同日午後熱海、二十三日午後に突然卒倒されて以後病床にあられた。

この情況から考えると、村田翁が石碑建立の際に王の舟に乗ったのは、翁が徴兵検査を受けた年（昭和四年）の前年（昭和三年）の冬のことではないか。仮に翁が昭和四年の四月に徴兵検査を受けた

とすれば、翁の記憶の誤差は数か月しかないわけである。さきに引用した十月一日の竹霞の書簡には、「漸く停車場より…（中略）…保津橋辺迄着。昨今、筏組立、川水よく都合にて現場へ下し申すべく候。…（中略）…猶、落成の上は、早速言上仕るべく候」という記述があった。となると、昭和三年十一月以降、天皇・皇后が東京に還幸啓の際に、供奉として王が京都を離れた十一月二十六日以前、この間に建立が行なわれたと考えてよいのではないか。

『行実』の王の略年譜を見ると、前月の十月二十三日から、和泉摂津地方に出張され、翌月の十一月一日には、甲南高等学校視察、二日には湊川神社・人丸神社等参拝。七日には天皇・皇后宮京都御着輦につき奉迎、九日には天機・ご機嫌奉伺、十日からは即位御大礼に奉仕。『行実』の本文では、十四日に大嘗祭をはじめ連日の儀式に供奉、十九日に伊勢行幸啓を京都駅に奉迎の後、京都での奉祝行事を統裁され、その間、高尾・榎尾・榎尾などを遊覧。二十二日より伊勢より京都への行幸啓を奉迎し、二十六日に東京へ還幸啓の供奉を仰せつけられて二十七日に帰京、無事退任を果たされたところ。

この間、保津川での「保寿泉」建立式に王が光臨され得る日時を考えた場合、十一月三日から六日の間、或いは、『行実』に「その間、高尾・榎尾・榎尾などを遊覧され」たとあって具体的日取りは記録されていない十一月十五日から十八日の間のいずれか一日であろう。これ以外の日に保津川を下られる余裕はなかったと言つてよい。

(2) 「保寿泉」の名とその碑に込められた意味

「保寿泉」碑が、昭和三年十一月の大典の時期に立碑されたのは、

実のところ、建立の時期を意図的に大典に合わせたのではないか。現地調査の際には、単に三角形の自然石（卑俗な喩えをするならば、おむすびのような石）としか目に映らなかったが、後日、写真をじっくり見ると、富士山の形に似ているように思えた。

一般に石碑と言えば四角柱である。保津川河畔まで運ぶことを考えたなら、その方がずっと運びやすい。それなのに、敢えてこのような形の自然石を選んだのは、即位の大典を意識して、日本を象徴する「霊峰富士」をイメージできる三角形の石が選定されたのではないか。昭和三年の即位の大礼より僅か五年前の大正十二（一九二三）年七月に、摂政宮（後の昭和天皇）が自ら富士山を登山されていることを考えあわせると、この推測は的外れではないと思われる。

ところで、「保寿泉」は「保津の泉」をアレンジして命名されたものと考えられるが、「保寿（寿を保つ）」としたのは、新天皇の「保寿」を祈念して命名されたとは考えられないだろうか。このように推測するのも、次のような事実があるからである。邦彦王が三年続けて保津川下りされ、廻り淵の泉水を持ち帰られて茶会を開かれたことが、村田翁の回想にあった。となれば、その水で点てたお茶は昭和天皇が賞翫されたかもしれない。王は天皇の義父であるから、その可能性も高いであろう。それ以前に、王が摂政宮に川下りの爽快さをお話ししてお勧めしたのではないか。事実、大正十五（一九二六）年には摂政宮が、保津川下りを楽しまれているのである。王が新天皇の「聖寿万歳」の願いを込めて「保寿」の泉と命名した可能性は大いにある。

中国には吉祥や長寿を祝う「福如東海長流水、寿比南山不老松

（福は東海の長流の水のごとく、寿は南山の不老の松に比す）」という対句がある。簡単には「福如東海、寿比南山」とも云う。漢籍に通じていた竹霞は、王の御意を体し、廻り淵を東方の海に見立て、富士山の威容を偲ばせる三角の鞍馬石を終南山に擬え、その石に王の染筆を刻んで建立したのではないかと考えるのは憶測が過ぎるであろうか。竹霞は、数年後の昭和七（一九三二）年に描いた「嵐峡十二景」（加賀尾宏一氏蔵）のうちの一景「曲淵躑躅（きよくえんてきちよく／まがりぶちつじ）」において、「保寿泉」碑を恰も山のように描き入れている（図8中央）。

図8 平尾竹霞筆「曲淵躑躅」（部分）



ところで、前述し

た竹霞の「保寿泉水献上図」の識語には「昭和三年十一月吉祥」とあった。竹霞が泉水を献上したのも、王から命名を戴いたのも、十一月よりかなり以前であったが、敢えて即位の大礼が行なわれた十一月に命名して戴いたという「形」をとったものと考えられる。臣民挙って慶

賀すべき吉祥の月と結びつけることによって、保寿泉や石碑の価値も増すことになるからである。同様に、川西光之助翁の「命名記」が、竹霞と同様の形をとって記述しているのも、竹霞の意図を汲んだ結果であろう。

こうして考えてみると、竹霞は「保寿泉」命名および三大字下賜への御礼言上の意味あいから、王の染筆を刻んだ石碑を建立することによって、新天皇の即位と聖寿万歳、さらには邦彦王第一王女の良子女王が皇后になられたことへのお祝い（久邇宮家へのお祝い）としたということなのではあるまいか。

四、「保寿泉」余話

—— 梨木神社における茶会の開催と銘酒「保寿泉」の誕生 ——

保寿泉の水は梨木神社の茶会で使われたようである。さきに引用した川西翁の「命名記」の第二段に次のようにある。

「後数年、余 竹霞を訪ふ。竹霞曰く、『余 梨木神社を崇敬すること年久し。今老たり。殿下賜ふ所の三大字一幅を神社に献じ、毎年一回、泉を汲み、宝翰の下、献茶の礼を修め、同好の士女をして、靈液を服せしむるを得ば、余が願足る』と。余之を諾す。昭和己卯の年、十二月十五日、神前始（初）めて茶を献ず。今日庵宗匠 供奠し、町尻子爵夫人 宴席を掌る。賓客 堂に溢る」

「梨木神社」とは、京都市上京区に鎮座する旧・別格官幣社。祭神

は三条実万公・実美公父子。手水舎には、染井の井戸があり、醒ヶ井・県井とともに「京都三名水」として知られる。また萩の宮とも言われ、京都の萩の名所としても名高い。

「殿下賜ふ所の三大字一幅」とは、邦彦王が竹霞に下賜した「保寿泉」の三大字を軸装して掛幅としたもの。一般に毛筆揮毫した作品を石に刻する場合、作品を石に張り付けて刻する方法（この場合、作品は石とともに刻まれるので残らない）と、作品の文字を双鉤（籠字）に託してそれを石に貼って刻する方法とがある。「保寿泉」碑の場合、皇族の染筆であることを勘案して、後者の方法が採用されたのであろう。よって邦彦王染筆の原本は竹霞の手許に残っていたのである。文中の「宝翰」とは邦彦王染筆の原本を指す。

「昭和己卯」は、昭和十四（一九三九）年。「今日庵宗匠」とは、裏千家十四世家元・碩叟宗室（一八九三―一九六四）。一般に淡々斎と呼ばれる。「町尻子爵夫人」とは、町尻量基（一八八八―一九四五・陸軍中将）に降嫁された賀陽宮由紀子女王（一八九五―一九四六）のこと。由紀子女王は、邦彦王の兄・邦憲王の第一王女で、邦彦王の姪。

この段の内容を解り易く記すと次のようになろう。「数年後、私は竹霞を訪問した。竹霞が言うには『私は梨木神社を長年崇敬していますが、もう年を取りました。殿下から下賜された「保寿泉」の三大字の掛幅を梨木神社に奉納し、毎年一回、保寿泉の水を汲んで、殿下染筆の掛幅の下で献茶式を行って、同好の人々に美味なる清泉で点てたお茶を飲んでいただけるならば有り難いことです』と。私はこの件を承諾した。昭和十四年十二月十五日、梨木神社の神前に

おいて初めて茶を献じた。裏千家の淡々斎宗匠が茶を供え、町尻子爵夫人の由紀子氏が茶会を取り仕切った。お客様が部屋に溢れるほど沢山おいでになった」

邦彦王より下賜された「保寿泉」の三大字の掛幅を、竹霞が梨木神社に奉納しようと考えたのは、竹霞の言葉通り、長年崇敬していたという理由によるものであろう。ただ筆者は、それに加えて、梨木神社が明治十八年（一八八五）年に久邇宮朝彦親王の令旨に基づいて創建された神社であるということも、理由の一つではないかと考える。朝彦親王は邦彦王の父宮であり、邦彦王とは因縁浅からぬ神社なのである。

川西翁の「命名記」の最後に、銘酒「保寿泉」誕生の逸話が記されている。

「時に鈴木三郎君曰く、『希^{ねがは}くば此の名水を以て酒に醸し、高貴の門下に献ずることを得ん』と。余 即席 之を友人醸家・安田末次郎翁に謀る。翁曰く、『試みに之を験せん』と。験して曰く、『善し』と。即ち長子・揚之助に命じて事に当らしめ、美酒を醸すことを得たり。遂に泉名を取りて、亦 之を酒に命ずと云爾。昭和十五年六月吉日、為 保寿泉醸造家・安田揚之助君。別格官幣社梨木神社宮司 川西光之助」

「鈴木三郎君」とは、関東都督府外事総長・久邇宮御用掛。鈴木貴太郎首相の弟。「安田末次郎」とは、安田酒造主人。揚之助はその長男。「云爾」とは、文章の末尾に置き、上文の内容を強調する語。「しかいふ」と読み、「以上の通りである」の意。

現代語にすると「その時、鈴木三郎君が言った。『この保寿泉の名

水で酒を醸造して高貴な方々に献上できたらいいが』と。私はすぐにこの件を友人の醸造家である安田末次郎翁に相談した。翁は『（では泉水を）試飲してみよう』と試飲したところ『これはいいね』と言った。翁はすぐに長男の揚之助に酒造りを命じて美酒を醸造することができた。こうして、保寿泉の名をとって酒の名としたというわけなのである』というほどの意であろう。

久邇宮の御用掛をしていた鈴木三郎氏の提案によって、川西翁が安田酒造の主人に保寿泉の水で酒を醸すことを勧めると、美酒ができたので、泉名の「保寿泉」を酒の銘柄としたという話である。



図9 純米吟醸酒「保寿泉」

安田酒造は嘉永二（一八四九）年創業の、三条商店街にあった酒蔵であるが、今を去ること十年前に廃業した。現在では、京都・川端丸太町の鶏料理の名店「京の鳥どころ 八起庵」でしか飲めない銘柄として、京都の佐々木酒造が造る純米吟醸「保寿泉」（図9）にその名が継承されて残っている。

五、結 語

本稿では久邇宮邦彦王書丹の「保寿泉」碑をめぐる、その泉名

の命名の経緯および石碑建立の経緯について考証した。

邦彦王が、泉名を「保寿泉」と命名されたのは、恐らくは、この泉水で点てた茶を賞翫されたであろう新天皇の「聖寿万歳」を祈念し、さらには「国家安泰」の意味をも含めたのではないだろうか。邦彦王は昭和天皇の義父に当たる方であり、裕仁親王の即位には、感慨一入のものがあつたと推測される。

また、すでに忘れ去られてしまった石碑建立の時期を、昭和天皇即位の大典が行なわれた昭和三年十一月と推定した。さらに、石碑建立が意図的に大典の時期に行なわれた可能性も指摘した。竹霞は、天皇の即位を祝賀するのは勿論のこと、邦彦王の染筆を石碑に刻むことによって、邦彦王の王女である良子女王が皇后となつたお祝いとしたのではなからうか。

■注

- (1) 「久邇宮三代の書について」(本紀要39・二〇一一年)、及び「久邇宮俣子妃筆『三十六歌仙和歌御色紙』について」久邇宮と竜田神社の関係を物語る御下賜品の考察」(本紀要40・二〇一二年)の二篇。
- (2) 「命名記」を次にそのまま翻刻する。

純酒保寿泉命名記／「慶維新」(関防印・朱文楮円印) 山城保津川曲測の北岸断崖絶壁の下清泉湧出す篠山の人画家竹霞平尾惠常に之を愛飲す昭和登極の大典に際し 久邇大將宮邦彦王殿下京都南禅寺畔野村／邸に館し給ふや竹霞人を曲測に遣はし清泉を汲み日々之を 殿下に献ず／殿下嘉賞し給ひ保寿泉の三大字を書して之に賜ふ竹霞 恐懼感激して之を巨石／に刻し曲測潭上に置く後数年余竹霞を訪ふ竹霞曰く余梨木神社を崇敬する／こと年久し今老たり 殿下賜ふ所の三大字一幅を神社に献じ毎年一回泉を汲み／宝翰の下献茶の礼を修め同好の士女をして靈液を服せしむるを得ば余が願足／ると余之を諾す昭和己

- 卯の年十二月十五日神前始めて茶を献ず今日庵宗匠供／奠し町尻子爵夫人宴席を掌る賓客堂に溢る時に鈴木三郎君曰く希くば此の名／水を以て酒に醸し高貴の門下に献ずることを得んと余即席之を友人醸家安田／末次郎翁に謀る翁曰く試みに之を験せんと験して曰く善しと即ち長子揚之助／に命じて事に当らしめ美酒を醸すことを得たり遂に泉名を取りて亦之を酒に／命ずと云爾／昭和十五年六月吉日為保寿泉醸造家安田揚之助君／別格官幣社梨木神社宮司川西光之助「光印」(白文方印)「南溪」(朱文方印)
- (3) 「国指定重要文化財『野村別邸 碧雲荘』のサイト」(nekinsou.jp)参照。

- (4) 竹霞は大正十(一九二一)年に、紀伊徳川家別邸「双青寮」で「和歌浦廿一勝」を描いたことがあり、和歌山の旅館経営者である中尾氏から支援を受けていたそうである(加賀尾宏一氏教示)。そのような関係から、和歌山から竹霞の許に仏手柑が届いたものと思われる。

- (5) 村田翁の回想で「初めて船頭に出たのは：(中略)：十三歳ですな。大正十二年(一九二三)ですわ」とあるが、これは聞き手の小谷氏の聞きとり間違いであろう。「十年」と「十二年」は聞き間違いの可能性が高い。

- (6) 保津町誌編纂委員会編「保津川峡谷の地名と謂れ」(保津町自治会、二〇一一年)の「保寿泉」の項では、翁の回想を根拠としているのであろうが、「昭和五年」に「据え付けたという」とある。仮に昭和五年であれば、「碑を建てるときにね、わしらが殿下を舟に乗せていきましたんやわ」という回想の中の「殿下」は、昭和四年に薨去した邦彦王ではなく、邦彦王第一王子の朝融王(昭和五年当時、満二十九歳)であることになる。もし、翁が朝融王の舟にも乗ったとすれば、二代の宮殿下の舟に乗ったわけで、光栄なることこの上もなく、大いに自慢すべきことである。必ずや記憶に刻まれて、「殿下の息子さんの舟にも乗ったんどっせ」という回想があつてしかるべきであろう。ところが、翁の回想には朝融王は登場しない。このことから、昭和五年である可能性(邦彦王薨去後に石碑建立が行なわれて、朝融王の舟に

も乗った可能性」は、著しく低いと言わざるを得ない。

(7) 二〇〇六年の篠山市立歴史美術館特別展「平尾竹霞展」の折に開催された松尾芳樹氏の講演レジュメに拠れば、竹霞は、昭和八(一九三三)年十二月の皇太子(亡き邦彦王)にとっては外孫、生誕をお祝いして、久邇宮妃殿下に作品を献上したようである。

■付記

ラフティングのよる実地調査には荊妻も同行(図10)し、調査に協力してくれた。例年、中国の険しい山岳地帯での調査では、危険が伴うため、筆者から同行を促すことはなかったが、今回の保津川での調査は自発的に参加してくれた。

ラフティングによる 図10 ラフティングを終えて(ガイドさんと)



保津川下りは、規則を守りガイドさんの指示に従えば、危険ではないことを、今回の調査において、身をもって実感できた。最初は怖がっていた荊妻も、下り終えた後は爽快感に浸り、またラフティングで川下りをしたいと笑顔になっていた。ラフティングの後、渡月亭さんで嵐山温泉に浸かり、渡月橋を眺めながら京料理と伏見の銘酒に舌鼓を打った。本稿の読者の方々にも保津川下りをお勧めしたい。

■追記

印刷所に入稿後に、平尾竹霞顕彰会の代表・加賀尾宏一氏より、昭和三十三年八月二十三日付の京都新聞に、「保寿泉」の紹介記事が出ているとの教示を受けた。そこには、邦彦王の「保寿泉」三大学の揮毫は、昭

和三年九月、赤倉別邸におけるものとある。石碑の建立については、平尾竹霞が、「当時の田中善之助亀岡町長、酒井為吉亀岡駅長、木村作次篠村安詳(内田補：尋常高等小学)校長らとともに建碑を思い立ち、昭和三年十一月十八日」に「曲り淵に建てた」とあった。

本稿八頁で、「保寿泉」建立式について、昭和三年の「十一月三日から六日の間」か「十一月十五日から十八日の間のいずれか一日であろう」と述べたが、筆者の推定は間違っていないことになる。

■鳴謝

実地調査を行ない、資料を検討し、本稿を執筆するに当たり多くの方々のご好意・ご教示を戴いた。その方々を時系列でご紹介したい。

調査をする数か月前より、大阪商業大学の原田禎夫先生には、保津川下りの様子や調査の方法について、メールで何度もご教示いただいた。また、保津川遊船代表理事の工藤正氏には、調査に際して過分の御好意を戴き、また調査後も色々ご教示戴いた。調査当日は、ラフティングのガイドである岡田竜也氏・壘谷侑真氏にお世話になった。調査の翌々日に昼食を喫した京都・川端丸太町の「京の鳥どころ 八起庵」では、社長の川西光敬氏から、御祖父様の川西光之助翁の筆になる「純酒保寿泉命名記」を見せて戴き、お土産まで頂戴し、本稿において「命名記」の写真を使用させて頂いた。篠山歴史美術館の山本宏美氏からは、多数の有益なる資料をご提供戴いた。平尾竹霞顕彰会の代表・加賀尾宏一氏には、お電話にて色々ご教示戴き、また竹霞の画の写真使用を快諾して戴いた。現在、銘酒「保寿泉」を醸造されておられる酒蔵である佐々木酒造の社長・佐々木晃氏には、銘酒「保寿泉」についてメールにてご教示戴いた。梨木神社欄宜の多田氏には、同社所蔵の資料(邦彦王染筆および川西翁筆「命名記」)について、メールにてご教示戴いた。茲に皆様方のご芳名を拝記し、頓首再拝してご好意に感謝申し上げます。

(二〇二二・九・二七 受理)